

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	山本 喜晴
論文題目	「境界」としての身体に関する心理臨床学的研究		
(論文内容の要旨)			
本論文は、境界をもたらすものとして身体を捉え、身体のもたらす境界について、さらに身体性の伝達について心理臨床経験や調査に基づいて検討考察したものである。 まず第1章では、線や面ではないかたちでの境界理解として、交点としての境界に注目し、身体が意識にもたらすものを交点としても理解している。このような交点を自我意識に開かれる境界性とする仮説を基に、境界としてのチマタそして交点としての境界という考えに繋がっていった。かつてはこの交点としてのチマタは日常風景に実在し、チマタに出かけるのが身体であった。その身体に付随してやってきては身体から離れ、そのチマタに居る別の身体に憑いたりするのが魂であると考えられていた。それは近代的な自我とは別のものであり、憑依や脱魂を特徴とするシャーマニズムとしての治療において成立していた。そして古代には現代のような自我は成立していなかったが、その代わりにチマタが実在し身体がチマタに赴くことによって、そのチマタにおける様々な道筋の交点に自我が自覚されていくことになる。 第2章では、芸能にまつわる意識を検討するために、能楽師に演能中の意識のありかたと、それまでの芸の形成過程について聴取した資料をもとに考察している。とりわけ演能体験の中核に「充実感」があり、より洗練された「充実感」がもたらされ、また曲を体験することとしての「憑依」と「脱魂」に注目が置かれた。さらに曲を体現することとしての「憑依」だけでなく、「脱魂」に通じるような演能状況全体を外から眺める視点の重要性が示された。心理臨床においてこの「憑依」と「脱魂」を同時に達成することが、非常に重要であることも考察されている。そして能における「披き」という制度の背景に「憑依」による通過儀礼を見て取れる可能性も提示することができた。 第3章では、心理療法の「かたり」の中に見出される芸術的な声の表現を「うた」と捉え、その意義を3つの事例に基づいて考察されている。3つの事例が抱える症状と「うた」の形式は個々に異なるものであったが、これら全ての「うた」が心身の変容にとって重要であったことが示された。そのことから「かたり」の中に「うた」を聞こうとする面接者の態度が、心身の変容にとって大きく関係することが示唆された。しかし、その一方で身体感覚への関心が身体化を招き寄せていることから、筆者が考える心身一致の思想においては課題が残された。 第4章では、ヘーゲルの弁証法を否定するかたちであらわれたラカンの理論における「女性の享楽」が、事例研究法に関連するものであることが論じられている。ヘーゲルの理論では声は身体の延長にあるものとして理解され、これが心理臨床に用いられているところがある。しかし、ラカンの理論では、声は身体や言語が属する次元とは別の次元に属する対象aの代表とされる。さらに身体は、外側から生きられる身体であると指摘されている。晩年のラカンは、「女性の享楽」すなわち大文字の他者の享楽は、ファルスの享楽や対象aの享楽を超えた身体体験と定義し、心理臨床の報告によって示される身体感覚にも通じることを示している。臨床の場に響く声を言葉として書き留め、書くことによってその声を他者に伝えようとする事例研究の方法論は、「女性の享楽」によって説明されることも提示された。			

(続紙 2)

第5章では、遺伝カウンセリングにおける心理臨床面接の経験をふまえて、遺伝やDNAという概念が我々に何をもたらすかについて考察された。DNAの語る物語がたとえ神話であったとしても、それは「あの世」の次元が欠落したとても特殊な神話であることが示された。さらにチマタとしての境界という視点を援用し、DNAが言語として実体化した状況では、従来の素朴に直線によって二元論的に表された境界や自我ではなく、またネットワークを移動する意識でもなく、交点であるチマタに佇みそして交点として意識することが超越性に開かれるという仮説を基に論じられた。

第6章では、娘の不登校を機に来談された40代の女性との3年間にわたる臨床心理面接過程を詳細に示し、それを基に心理療法で生じた心の動きと、心と体の結びつきを検討考察されている。心理面接の中で時折クライアントから語られた「縁」は、身体と心のつながりである「縁」であり、やがて「境界」としての身体に繋がっていく。実際の面接経過では、クライアントは初め娘の様々な行動に対して激しい苛立ちを示していたが、やがて娘は大学生になり自らの道を歩み始めた。面接終盤で娘が夜尿傾向を示したり、クライアント自らの人生に気づき始めることが多くなった展開を示したが、考察が示すようにクライアントが語った「縁」を自我と重ね、交点としての自我の取り組みを面接にもっと生かされていたならば、終結ではなく新たな展開があり得たことは否めない。

最後に、結論で境界としての身体が我々の意識にもたらすものとして、自我が自らの点として理解することによって境界性を帯びることが示唆されている。その時に、チマタとしての自我という観点をもつことで、どのように心理臨床の場がもたらされるのかを、心理臨床実践の経験と思索により、今後の課題と展望にしていきたいとして論文を結んでいる。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、身体を「境界」として捉え、その「境界」としての身体が、心の救済にどのように働くのかを心理臨床学的に検討したものである。まず筆者は、身体は物理的に空間を区切り、2つの領域を区別してきたと考える。しかし、その区切りは物理的な区切りだけでなく、心理的な区切りでもあり、しかも身体はその区切られた2つのものを統合することも可能であり、その二者間のさまざまな相互作用や関係を生み出すとも考える。身体におけるその二者の間を「境界」と名づけ、「境界」としての身体を見たときに、様々な心理臨床学的な考察が生まれたところが、この論文のオリジナルで、重要な課題をもたらしている。

まず「境界」という視点によって、身体と意識の関係を様々な対概念との関連から多角的に捉え考察している点が評価された。心身症や離人症を「境界」としての身体の観点から考察できることを指摘し、臨床と直結した内容に結びついた身体論を展開できたことも評価できる。筆者は、「境界」を考えたとき、それは身体を越え、地形や風景や自然にもその特殊な意味づけが生まれてくることを論じ、「境界」が今後広がりをもたらす重要なテーマであると考えている。このように身体において「境界」は、将来心理臨床学的な観点から見て豊かな知見が存在することを示したものである。

次に謡と舞いが中心となる身体表現を旨とする能に関して、その実践性が心理臨床の実践と相通ずるものがあることが指摘されている。その上で、能の舞踏がもたらす「脱魂」と「憑依」は、「境界としての身体」を考えるための心理臨床における多数の新たな手掛かりと見解を与えている。実証学的研究として、能楽師たちからの演能体験を聞き取り、それらを心理臨床の実践に応用しようとする姿勢は、先駆的な試みであると評価できる。今後、能と身体表現との関連から、さらに臨床的実践知へと繋がる可能性が期待できる。

さらに筆者は、心理臨床の場において声による「語り」と身体性について3事例に基づいて論じているが、心身の延長として声が重要な役割を果たし、そして心理臨床が心身の共振・共鳴の主たる場であると位置付けるなど、声が心理臨床の場においてまさに「境界としての身体」の役割を持っていることが示された点はきわめて興味深いものである。

また、声に対するヘーゲルの理論による視点とラカンの理論による視点を検討し、ラカンの提唱した「女性の享楽」という身体経験を心理臨床学的に位置付けた斬新な視点を展開している。そして、筆者は「女性の享楽」をメタフィジカルともフィジカルともつかない未知なる身体経験を示すものと理解し、それが「境界としての身体」を考える上で重要な視座を与えてくれて、心理臨床における心の救済としての意味も示唆することを提示した。さらに、「女性の享楽」としての身体感覚が事例論文や事例研究の意義に繋がっていく論考は、説得力に富んだ仮説を形成し十分に評価できるものである。

ところで筆者は、遺伝カウンセリングを先駆的に実践してきたが、遺伝子やDNAに関する研究が近年飛躍的に発展するなかで、〈遺伝なるもの〉が我々の意識の在り方に強い影響を与えていることが論じられている。さらに遺伝に関わる進歩著しい生物学と心理臨床学との関係や接点も論じられている点において、今日的課題を示したことは評価されるものである。さらにDNAに関わる神話が、遺伝子研究の発展とともに新たな我々の生きる神話へと変容することの示唆も得られた。また、境界としてのチマタをDNAの構造と関連づけた論考は、独創的なものとして注目され

(続紙 4)

た。

筆者は最後に、「縁」のもとで生きる女性との面接過程というタイトルで1事例を詳細に取り上げ、身体と心のつながりである「縁」を基調にして、「境界」としての身体について心理臨床学的に検討している。経過を詳細に考察することによって「縁」と身体がもたらす境界や「縁」とチマタとの関係、そして自我の変容の可能性や超越性にまで開かれた論考を行っている。

本論文は、「境界」としての身体を起点として、心身症や離人症を論じ、チマタと境界との関係、能と身体表現からの心理臨床学的考察、声や歌や音韻と心理療法との関連、ラカンの提唱した「女性の享樂」から展開させた事例研究・事例論文の意義、遺伝子やDNAと我々の意識の在り方との関係、事例を基にした「縁」と身体との関係など縦横無尽に論を展開し、心理臨床の場に「境界」としての身体と我々の自我の在り方という有益な視座を与えた。このことは、心理臨床実践においても大きな功績だと言える。

ただ、様々な領域や分野からの観点や論考は評価できるが、心理臨床学としての専門分野の位置づけや独自性が却って弱まったという指摘や各章の繋がり自体が論理的に充分でないとの指摘も試問において出された。しかし、このような指摘や批判は本研究のさらなる発展や臨床実践への応用と貢献という視点において、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成23年5月11日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降